

宇佐神宮本八幡のえんぎ 上巻

—影印、翻刻—

筒 黒

井 田

大

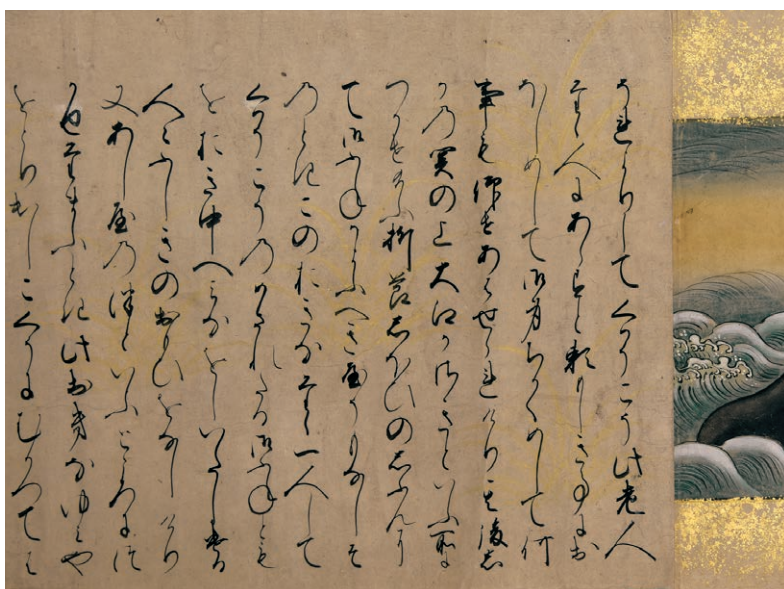
祐 彰

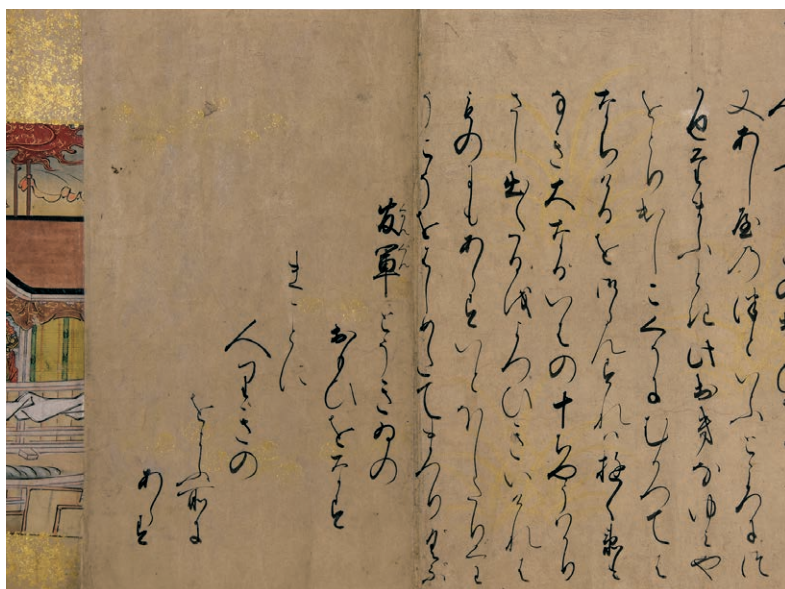


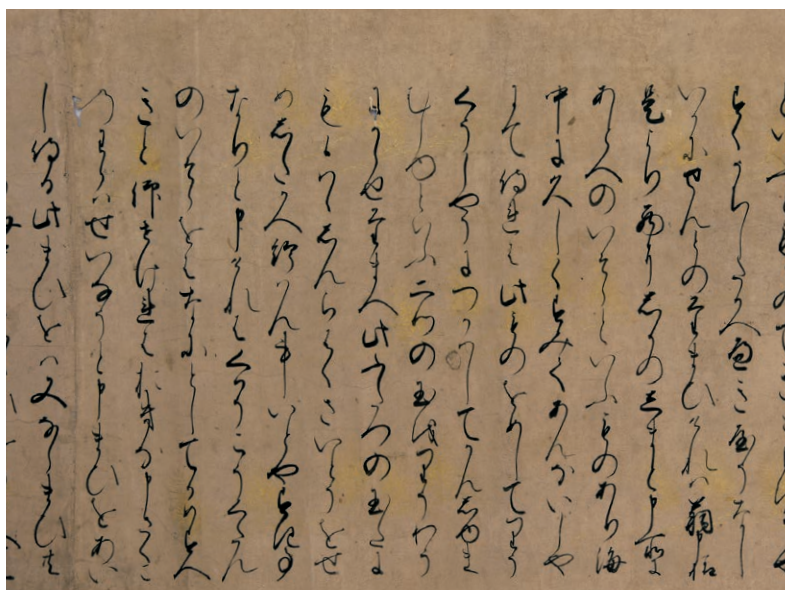


され我朝のこころはまごころなり
 うち中へふくむるはじりて天に
 代地神へ代つる十二代は各神の
 御世にてありてはこころはまごころなり
 神うまておるや教子方歳也
 らつるふ神代をとりて人まの
 代にたりかつこころは神武を
 らつる則地神才五れたり
 うんやこころはまごころなり
 才二のわりたりらんじを
 たり十六代はつる人むらんを
 とりハハの八幡大菩薩の御也









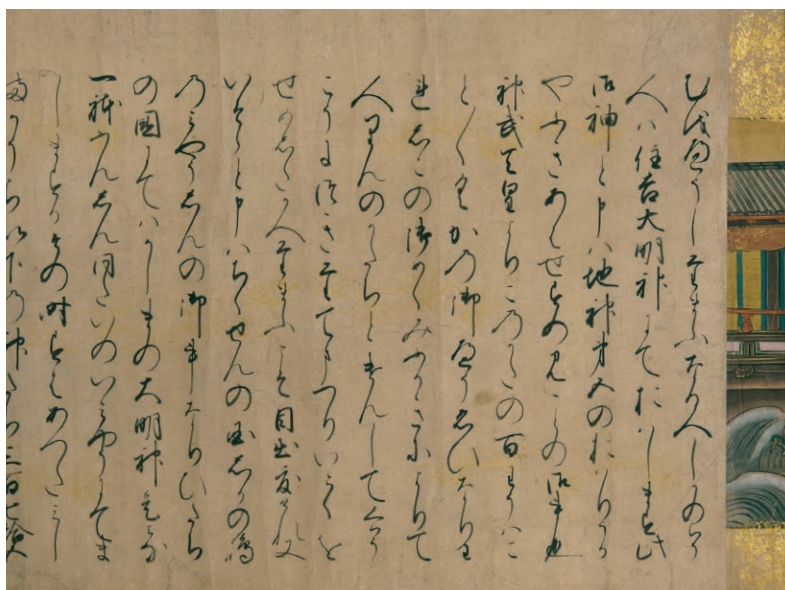




[illegible]

りんわぶとせんとうはあら
 うさうとせつをいひ
 う日かゝかりのうさうめ
 やうくうしこそてうさう
 ゑんとあさうくらや
 とばえーさんけうくは
 二のまわりけすべらて人か
 とにやこして異國とせつ
 えーといろはひきそ
 ちりくうくはなほしこた
 ーんのしよと花ふりと
 わりーしきざいりを
 そてまうくうくはあし
 まりうくはゆこひいてん
 のさんちの二くおれりえん
 の日さうせんはさうんーり
 うさうくはうさうくは





の國にていゝまの大町神を
一神とせん同様のつやとて
いゝまの時にあつて
はつらつ下の神とて三百七
人軍八さうのつよは同様の
いゝまのつよは同様の
三百七十八人軍八さうのつよ
はつらつ下の神とて三百七
人軍八さうのつよは同様の
いゝまのつよは同様の

川
らり
らり

略 解 題

大分県宇佐市に鎮座する宇佐神宮は、全国に四万余社ある八幡社の総本宮であり、伊勢神宮に次ぐ第二の宗廟としても崇敬されている。

その宇佐神宮の縁起を語る資料としては、『宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起』や宇佐神宮寺の社僧であった神吽により編纂された『八幡宇佐宮御託宣集』、『宇佐大神宮縁起』等が知られるが、八幡縁起絵巻も宇佐神宮の歴史を語る資料の一つと言える。

本誌で紹介する伝本は、宇佐神宮所蔵で（整理番号は、『宇佐神宮宝物 八幡縁起部 第十二号三番上・下』）、宇佐市有形文化財に指定されている。

以下に、まず本絵巻の書誌的事項を記す。紙本著色上下二巻で、詞書は漢字平仮名交じりで綴られている。外題に各々、「八幡のえんぎ 上」「八幡のえんぎ 下」と記されるが、内題は無い。各々の法量は、上巻一〇九二・二厘、下巻一〇〇〇・七厘であり、表紙の大きさは、上巻が縦三一・七厘、横二五・〇厘、下巻が縦三一・八厘、横二二・四厘である。制作年代は江戸時代前期と思われる、金泥を施した大変美麗な絵巻であるが、上巻の詞書に補修の際に生じたと思われる錯簡がある。なお、紙幅の関係で、本号に

は上巻、次号に下巻のカラー影印と翻刻を掲載する。

本絵巻は、冒頭に塵輪襲来場面を有するため、諸本分類では乙類系統に属する。

その乙類系統の嚆矢とされるのは、足利義教が永享五（一四三三）年に、宇佐神宮、石清水八幡宮、菅田八幡宮の各八幡宮に同日に奉納した絵巻である。これらの中で、宇佐神宮本は現在、所在不明であり、石清水八幡宮本は昭和二二（一九四七）年の社務所の火災で焼失したため、現在、唯一現存が確認できるのは菅田八幡宮本のみとなる。

このように、宇佐神宮には、かつて義教が奉納した絵巻が存在したので、本絵巻はその模写本とも考えられるが、本絵巻とその現存本である菅田本を比較すると、詞書の文言や挿絵の構図に相違する点も見られる。

例えば、本絵巻冒頭の仲哀天皇と塵輪が向き合う挿絵は菅田本のそれとは構図が異なる。また、住吉明神が大岩に矢を射る挿絵では、本絵巻が船の上に立つ住吉明神を描くのに対して、菅田本では浜辺に立つ姿を描く。このような相違点から、本絵巻は義教奉納本の模写本とは考え難い。

ところが、本絵巻と類似した詞書、挿絵を有する伝本が現存する。その一つが、かつて紹介した榊原本八幡の本地上・下（佛教大学『文学部論集』第95・96号、平成23年3月、24年3月）である。さらに、木村朗子氏は兵庫県姫路

市魚吹八幡神社本を紹介され（『津田塾大学紀要』45、平成25年3月）、乙類系統の内、菅田本をA系統、榊原本や魚吹本をB系統と再分類された。宮次男氏の甲乙二系統の諸本分類は、なお動かないものの、本絵巻は、この乙類系統の流布を再検討する上で、非常に貴重な伝本である。

なお、熊本県熊本市に鎮座する藤崎八幡宮には、肥後熊本藩の藩主であつた加藤家、および細川家が各々奉納した八幡縁起絵巻が所蔵される。そのうち、細川家奉納本は、本絵巻と挿絵の構図がほぼ同一で、大変興味深い。藤崎八幡宮本については、機会を改めて紹介する。

翻刻に際しては、改行および表記は原本通りとし、句読点は施さず、用字は通行の字体に改めた。本文中に挿絵が入る箇所は、図一以下の形で示した。

付記 本書の影印・翻刻を許可された宇佐神宮、並びに宇佐神宮

宝物館、宇佐市教育委員会社会教育課文化財係、および調査・撮影を許可された藤崎八幡宮に心より御礼申し上げます。

小稿は、平成28年度科学研究費基盤研究(B)による成果の一部である。

宇佐神宮本八幡のえんぎ 上 翻刻

それ我朝あきつしまとよあしはらの中津くにと申はむかし天神七代地神五代つかう十二代はみな神の御世にてあるしたりきこくとぶねうにしてじゆみやう数千万歳也しかるに神代をはりて人わうの御代となりかのさいしよ神武天皇と申奉る則地神第五のおはりうかやふきあはせずのみことの第二のわうじなりしんむ天わうより十六代の御すへおうしん天皇と申はいまの八幡大菩薩の御事也御父はちうあい天皇の御宇二年みつとの酉のとしにあたりてしんらくより数万の軍兵せめ来つて日本をうちとらんとすしかるあひた天わうみつから五百余人の官軍をあひしたかへて長門国とよらのみやにして異国のけう

そくをふせかしめたまふこのときよりちんりんといふふしきの色はあかくかしらは八つにしてかたちはきしんのこつくなるかこく雲にせうして日本につく人民を取ころす事かすをしらす天わうあへのたかまる同しくすけまるに仰せてそうもんをかためさすちむりん来らはいそきそうし申へし人臣のちからにてたやすくうつ事あるへからす我十ぜんのちからをもつてかのかうふくせしめんと仰られけるすなはち二人弓矢をたいして門の両方にしゆこするに第六日にあたりてちんりん黒雲にのりて出来るたか丸武内大臣をもつてこのよしそうもんするにみかと御をとり矢をはけてはなちたまへはかのちんりんかくひたちまちにいきられてかしらと身と二つになりてそ

おちに

図一

かゝる所になにとかしたりけんなか
れ矢まいりてきよくたいにつゝか
なくあたる御命すてにあやうく
見えさせ給ひければきさきしんくう
くはうこうをちかつけたまひて仰
られけるは我いかにもなりなほ
くはうこう大將軍として異国^{いこく}を
うちたいらけ給ふへし御はらにや
とり給ふはわうしにてましませ
はたんしやうの後御くらゐにつけ
たてまつりたまふへしとて同じき
九年二月六日御とし五十一にて
つくしの檀日の宮におゐてつ
ゐにほうきよおはんぬくはうこう
すなはちせんくはうの御ゆいせき
にまかせてしんらはくさいをせめ
むと数千きのくんひやうあひくし
ていこくにおもむき給ふていとを

出させ給ふに一人の白はつたる老人
出来りてくはうこうの御まへにかし
こまるくはうこうはいかなるもの
そと御たつねありければかの老翁^{ろうおう}
こたへて申さく我はかたしけなく
もいこくをうちしたかへんかために
おほしめしたゝせ給ふこのおきな
も御ともつかまつりて御ちからに
なりまいらせんと申けるくはうこう
御こゝろのうちにおほしめしけるは
この老人のていさしてちからに成
へしとおほえすさりながらへむ
けの物にてやあらんとおほしめし
てめしくしてちんせいへおもむき
給ふくはうこうびんごのともにつ
かせたまふときたけ十丈はかり
なるうし沖のかたより出来りて
のらせ給へる御舟をそんせんとすそ
の時老おうかの牛^{うし}の二つの角^{つの}を
とつて海中へなけたればひとつ
のしまとなつていまに

あるこれなり

文字には

うしまろ

はしと

書たり

図二

それよりしてくはうこ此老人
たゝ人にあらすと頼もしき事にお
ほしめして御身ちかくめして何
事も仰せあはせられけり其後し
かの関の上大江かさきいといふ所に
つかせ給ふ折節しほひのしふんに
て御ふねかようふへきやうもなしそ
のときこのおきなたゝ一人して
くはうここのめされたる御ふねとも
をおき中へみなをしいたしける
人々ふしきのおもひをなしけり
又あしやの津といふところにつ
かせたまふとき此おきなゆみや
をとり出しこくうにむかつては
なちけるを御らんすれはゆくゑも

なき大なるいはの十ちやうはかり

さし出たるをよつひきいければ

ものにもあらずいとほしたりくわ

うこうをはしめたてまつりぐぶ

官軍くわんぐんとうきゐの

おもひをなす

まことに

人りきの

をよふ所に

あらず

図三

そのゝちかしゐの浜という所にて
くはうこ此老おうをめしておほ
せられけるは我いこくへわたりつく
といふともかのてきともをたや
すくうちしたかへへきやうなし
いかにせんとしたまひければ翁申様
是より西にしかのしまと申所に
あとへのいそらといふものあり海
中に久しくすみてあんないしや

にて侍れは此ものをめしてりう
くうしやうにつかはしてかんしゆま
むしゆといふ二つの玉をりうわう
にからせたまへ此ふたつの玉たに
も候はゝしんらはくさいとうをせ
めしたかへ給はん事いとやすき事
なりと申ければくはうこうくたんの
いそらはなにとしてかめすへ
きと仰せければおきな申さくこ
のわらはせいなうと申まひをあ
いし侍る此まひをは又ならまひ共
申なり海中にふたひをかまへて
此まひをまはせられてくたんのわ
らはさためてきたるへしと申く
はうこう此まひをはたれ人かまふ
へきとのたまひければそのとき
らう人さらはおきなまひ侍らん
といふにすなはちかいちうにぶた
ひをかまへてくふの人々をんがくを
そうするにらう人このまひをま
ひすまし侍りければくたんのいそ
ら此まひをあひしてまひのすか

たになりしやうゑをたいしはゝき
をしてくひにつゝみをかけたり
かいちうに久しくすみたるゆへに
かきひしなといふものかほにひし
ととりつきてあまりに見くるし
ければしやうゑの袖をときてかほに
おほひしてかめのこうにのりて
ふたひちかく出くるさてこそ此まひ

をはいまの

世までも

布を

おもてに

たれ侍り

けり

図四

かの海中に石となりていまに侍る
となんさてくはうこう老おうに
仰られけるはくたんの玉の事かの
わらはにおほせふくむへしとの給へは
おきな申さくいそらは海中のあん

ないにてくふし侍るへし御ししや
人をさためらるへしと申ければそれ
もらう人はからひ申へしとちよくち
やうありければさらはくはうこの御
いもうと豊姫とよひめを御つかひとして
くたんの玉をめさるへしとておき
なちよくちやうのおもむきいそらに
仰ふくめけるはなんちしらすや日
本のあるしんくうくはうこのの
御ほんゐをとけんかためにしんら
はくさいとうをせめしたかへむとし
給ふ日本こくにありなからきよくめ
いをいかてそむきたてまつるへき
はやくせんしにしたかつてちうせつ
を致すへしなかんつくりうくうに
二つの玉あり此たまをかりて人力
をついやさすして異国をせいはず
すへしとよひめにあひくしたて
まつりてりうくうにおもむきてち
よくせんのむねを竜王に申へしと
ありしかはいそらとよひめをくし
たてまつりてりうくうにおもむき

けりりうくうにゆきむかひてかん
しゆまんしゆの二の玉をかりえて次
の日さうたんにきさんしけりくわ
うこうなゝめならず御かんありて
みことのりして御ふねつくるへし
とありしかは三百人化人にはかに
出きたりて長門国ふな木山に入
てさいもくをいたしてふせんの国
宇佐のこほりにして四十八さうの
ふねをつくりいたすこれすなはち
八まん大ぼさつは本地阿みたによらい
にておはしませは六八てうせのひくわ
こきいたす大將軍には高良大明かうらう
神なりくはうこうもたちまちに
なんしのすかたとなりたまひ御
たけ九しやく二寸御は一寸五分ひ
かり有みとりの御くしひんつらに
とりからはにわけて御かふとをめし
御手にたらしゆのまゆみ八めのかふら
矢をとりそへて弓を御たらしと
いふことはこのたらしゆよりはしまれ
りとなんからあやおとしのよろひを

たてまつる御うみ月の事なれば
御ちふさの大きにして御よろひの
ひきあはせあはさりければかうら大
みやうしんくさすりをきりて御わ
きのしたにつけ給ふいまの世にわ
きたてといふはこれよりはしまり
けりかゝりけるところにくはうこう
御さんのけいてきさせたまひ御
らしきりになやましくおほしけ
れはつしまの国にて御ふねよりお
り白石にて御はらをひやしつゝ御は
こしに石をはさみたまひわかはら
みたてまつるところの御子日本の
あるしとなりたまはゝ今一月た
いなひを出給ふへからすとねきことし
たまひて又ふねにめされけり去
ほとに異国の兵船十万八千そう
軍兵四十九万六千よ人のりつれて
せめ来るいこくの軍ひやうは大勢なれ
は日本のひやうせんをうんかのことく
にとりこめて一とにうちころさん
とすすなはちくはうこう高良大明

神をつかひとしてちよくせんのむ
ねを仰ければしんらかうらいとう
日本はかしこき国なるによつて
女人を大将とするなり爰に高良
大明神白色の玉をうみへ入給ふ此
玉をなけたまふゆへにこそ高良
をは玉垂入と申大海たちまちに
ひてろく地のことくになるいこくの
けうとよろこひてことくく舟
よりおりたつてくはうこうをうち
とりたてまつらんとす日本のふね
にはりうしん下にありてしゆこす
るゆへにみちくゝて水のひる事なし
扱又あをき色の玉をなくるうみ
のうへみなきりてもとのことく大
海となるてきくんことくくし
ほ水におほれて魚のことしし
する物かすをしらすさらにかなふへ
きやうなかりけり

むをへうしたまふなるへしかのらう
人は住吉大明神にておはします此
御神と申は地神第五のおはりうか
やふきあはせずのみことの御事也
神武天皇よりこのかたの百わうはこ
とくくかの御へうゑひなりわ

れしこの御めくみふかきによりて
人りんのかたちとけんしてくはう
こうにつきたてまつりいこくを

せめしたかへたまふこそ目出度けれ又
いそらと申はちくせんの国しかの島
のみやうしんの御事なりひたち

の国にてはかしまの大明神是みな
一体ふんしん同たいのいみやうにてま
しますかその時すはあつたみし

まかうら以下の神たち三百七拾五
人四十八さうのふねに同しすかたに
けんし給ふさうしてその勢一千

三百七十五人四十八さうのふねにの
りつれてちくせんの国かの島より
しんらはくさいかうらいのこくわう大
臣みなかうをこふて我等日本のいぬと

なりてしゆこすへし毎年みつき
ものをそなへてまつたくけたいす
へからすとてせいこんをたてゝ

引しりそき
けり